自分の調べたいことを見つけ調べることができる子どもたち

—第1学年「てんじってなあに」の実践から—

川　﨑　一　朗

1　はじめに

子どもたちが，自分と身近な社会との関わりにおいて，関心を持つものは多い。道路の標識やバス停の時刻表，お店の品物や働いている人たちのことなど，さまざまである。たとえば，スロープのつけられた階段や，手すりのついた階段，青信号になると音の出る横断歩道などである。何のために，どのような理由で設置されているのかということを正しく知っている子どもは少ない。このような身の回りのもので関心を持つものを学習材として提示することにより，子どもたちが多くの疑問を持つことから，自分で調べたいことを見つけることをねらいとし，本実践を行った。

2　研究の視点と実践の概要

(1)　研究の視点

生活科の教科目標は次のとおりである。

> 具体的な活動や体験を通して，自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，その過程において生活上必要な習慣や技能を見につけさせ，自立への基礎を養う。

この目標を受けて，本校では，次のような子どもの姿をめざしている。

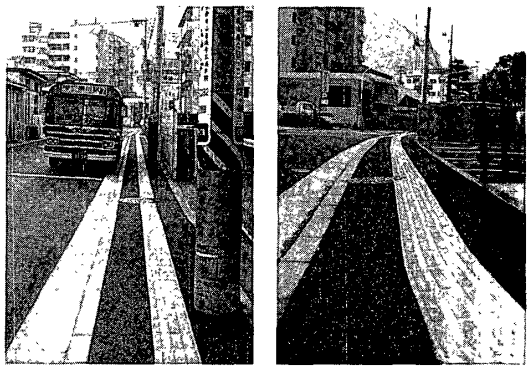
① 具体的な活動や体験を通して知的な問いや実践的な欲求を見つける子ども
② 自分で見つけた問題について，自分なりに解決する方法を考えたり，試したりする子ども
③ 自分で気づいたり感じたことを豊かに表現する子ども
④ 自分なりの考えをもち，考えに基づいて，判断したり，決定したりすることのできる子ども
⑤ 自分や友達のしたいこと（していること）をふりかえる子ども
⑥ 生活科で活動したことを基に，自分の生活を自分で豊かにしたり，工夫しようとする子ども

本実践では，問題解決的な学習のプロセスをより一層重視しながら，④に焦点をあて進めた。

(2)　実践の概要　単元「てんじってなあに」

①　単元について

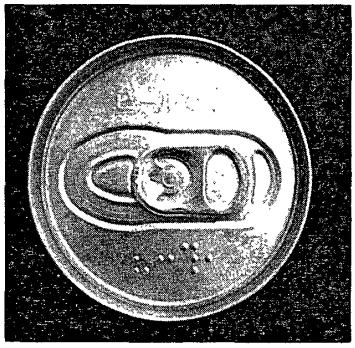
子どもたちの身の回りには，存在に気がついているがその用途をはっきりとは知らないものがあることは，前に述べた。本単元では，点字に焦点を当て，子どもたちにとって身近な存在である，点字タイルを学習材として取り上げた。点字タイルを教室に持ち込み，実際にふれることから多くの問いを持ち，自分の調べたいことを見つけることができるであろうと考えた。このことを単元を通した一連の学習の起点とした。



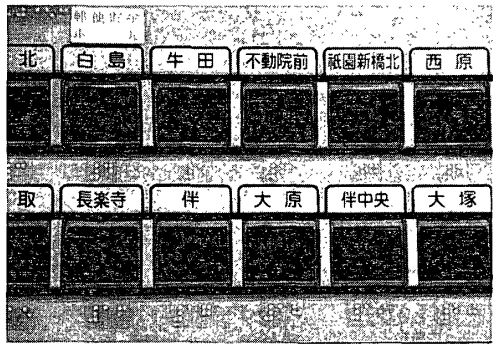
歩道に敷かれた点字タイル

子どもたちは，登下校の途中や町中に出たときなど，歩道に敷かれた点字タイルを見たり，足の裏で体感した子どももいるはずである。また，公共交通機関の乗

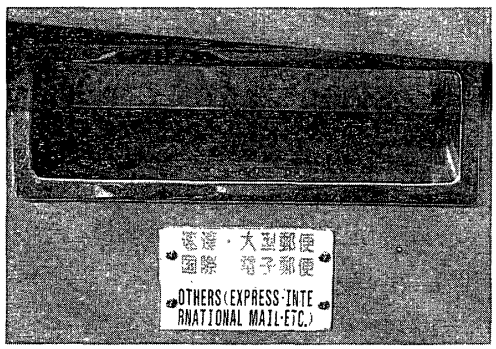
車券の自動販売機やポストに点字のシールがあることや缶ビールに点字があることに気づいている子どももいると思われる。（右の写真）このように，わたしたちの身の回りには，視覚障害者の人たちが暮らしやすいように設置してあるものが多い。それらに目を向けることから，様々な障害を持っている人たちを含めて，いろいろな人たちがいるということに気づく手がかりとなればと思いこの題材を設定してみた。



缶ビールの飲み口



公共交通機関の乗車券自動販売機



郵便ポストの差し出し口

② 学習のねらい

単元を通したねらいを以下のように設定した。

ア　点字に興味を持つことができる。

イ　自分なりに調べたいことを見つけることができる。

ウ　自分で調べたことをわかりやすく伝えることができる。

③ 活動内容と計画

活動の計画は次のように設定した。

第一次　点字タイルにふれ，調べたいことを見つける。　……2時間

第二次　自分なりに調べることができる。　……3時間

第三次　調べたことを発表することができる。　……2時間

④ 授業設計やねらいなど―本実践導入にあたって―

子どもたちにとって，入学してこれまでに障害を持った人とふれあう経験は，養護学級の友だちとの関わりがそのほとんどである。視覚障害者の方との関わりはほとんどないと思われる。本時では，視覚障害者の方の理解を進めていく第一歩として，歩道におかれている点字タイルにふれる。そのことから，「何なんだろう。」「何に使うのだろう。」「誰が作ったのだろう。」「どこで売っているのだろう。」という多様な疑問を持たせたい。次に，その疑問の解決方法を子どもたちに考えさせ，次の学習への意欲付けをはかりたい。

導入時の学習は，子どもたちが「点字」という表現方法に目を向け，身の回りの様々な点字に気づいていくこと，そして，学年が進むにつれて，「点字を読んでみたい。」「点字を書いてみたい。」「目の不自由な人と話がしてみたい。」というような学習に発展する出発点としたい。

本時のねらいは次のように設定した。

点字タイルに興味をもち，自分なりに調べたいことを見つけることができる。

授業仮説は次のように設定した。

点字タイルにふれることによって，多くの問いを持つならば，自分の調べたいことを見つけることができるであろう。

⑤ **評価の観点**

関心・意欲・態度	点字タイルにどのような興味を持ち，友だちの発表をどのような関心を持って聞いているか。
思考・表現	自分の疑問をどのように伝えようとしているか。
環境や自分への気づき	自分や友だちの表現の良さについてどのような気づきをしているか。

⑥ **学習の展開**

学習活動	みとりの視点	指導・支援活動
1　歩道用の点字タイルを手に取り，気がついたこと，予想したことなどを発表する。 • 柔らかい • 黄色の色 • においがある • 道にある • 駅にある • 点々と線のものがある	○点字タイルに対してどのような興味を持って関わろうとしているか。 ○これまでの経験の中から，どのような気づきをしているか。	1　2人に1枚，点字タイルを渡し，十分にさわる時間を設ける。 ◎いろいろな気づきが出るように自由に意見を言い合える場を設ける。 登下校時や，町中でのことを想起するような言葉かけをする。
2　点字タイルに対して，問いや疑問を持つ。 • どこで使われているのだろう • 何のためにあるのだろう • 誰が使うのだろう • どこで作っているのだろう • 外国でにもあるのだろうか	○点字タイルに対してどのような疑問を持とうとしているのか。	2◎点字タイルが何のためにあるのかという視点が持てるように，支援していく。
3　自分なりに調べたいことを決める。	○友だちの疑問を聞いた上で，どのような課題を持とうとしているのか。	3◎これからの学習の見通しがあるような課題が持てるよう，支援していく。

⑦ 導入時の授業から

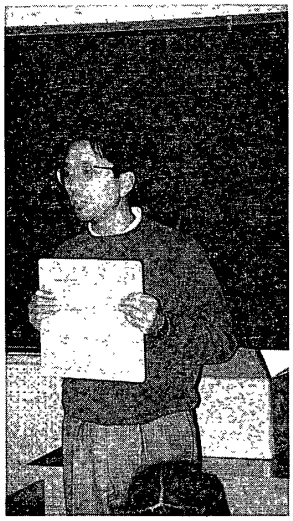


写真 1

導入時では，実際に点字タイルを教室に持ち込み，子どもたちに提示して，自由にさわることから始めてみた。（点字タイルは，市役所に問い合わせをし，業者の方を紹介していただき，購入した。）短い時間ではあったが，子どもたちは様々なことに気がついた。まず，ほとんどの子どもは手触りを感じていたようだ。（写真４）頬に当ててみたり，においをかぐ子どももいた。また，足で感触を確かめる子どももいた。そのとき，靴を履いたままで感触を確かめる子どももいれば，（写真２）点字タイルを並べて，靴を脱いで確かめようとしている子どももいた。（写真３）

子どもたちの気づきをあげてみよう。

○出ているところと，引っ込んでいるところがある。○出ているところがざらざらしている。○表の黄色のところは，小さな四角が集まっている。○ぶつぶつにいろいろな形がある。○柔らかくて曲げることができる。○裏がべたべたする。○臭いがする。

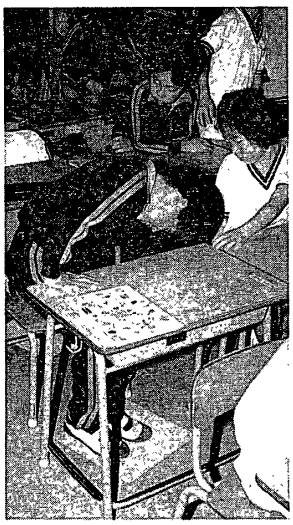


写真 2

このように，点字タイルの形状に気づいたものから，

○目の不自由な人の杖がへこんでいるところに入る。 ○平らで歩きやすい。

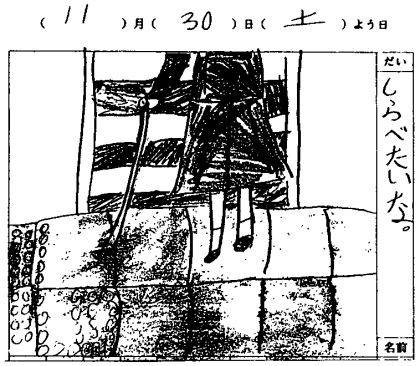
という用途にまで気づいたものまで，さまざまなものがあがってきた。子どもたちは，私が想像した以上に点字タイルの存在に気がついていた。おそらく，学校の行き帰りや，繁華街に出たとき，あるいは病院に行ったときなどに気がついていたのであろう。また，用途も知っている子どもも多いように思った。これらの気づきをもとに，多くの問いを持ち，自分の調べたいことを見つけることにした。しかし，気づきから問いを持ち，調べてみたいことを決める学習活動で，どうしたらいいのか戸惑う子どもが多かった。問題解決的な学習を初めて経験する１年生にとって，指導者の意図が伝わらなかった場面であった。子どもの考えの中には，気づいたことから，「不思議だな」「どうしてだろう」という思いは十分にあったように思う。改善する方法として，「点字タイルの色が黄色なのはどうしてだろう？」という例を提示した。そのことによって，「目の不自由な人の注意のしるしかな？」「別れ道のところは，点字タイルの形が違うと思うし他の形のものもあるかもしれないよ。」などの調べてみたいことが次第にはっきりしてきた。子どもたちにとって，気づいたことと，問いと，調べてみたいことは，同じようなとらえではないかと考える。今後，このような学習活動を積み重ねることによって，さらに問題解決的な学習の幅が広がると

写真 3

写真 4

考えている。さて，子どもたちが調べたいことは，次のようになった。

○大きさや形について　15名　○どうして点字タイルという名前なのか　5名　○なぜ黄色なのか　5名　○他の国でも点字タイルがあるのか　4名　○点字タイルの形と用途の違い　4名　○どこで作られているのか　4名　○どこで売っているのか　1名　○目の不自由な人がどうしてわかるのか　1名　○裏がひっつくのはなぜなのか　1名



自分の調べたいことを発表し合ううちに，調べたいことが明確になったり，変わっていった子どももいた。次に，調べてみたいことを表現してみた。（上の図）様々な表現があり，子どもたちの思いがそれぞれよく現れていた。

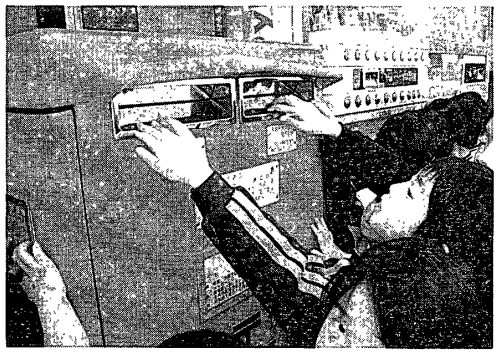
⑧　調べたいことを全員で確かめる

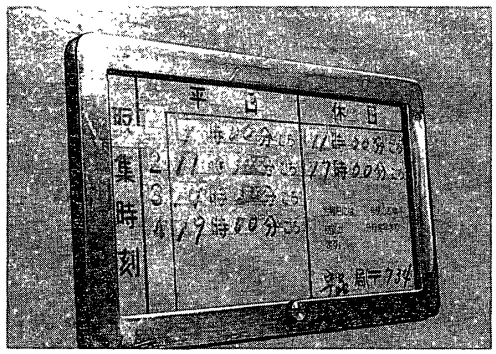
自分の調べたいことが決まった後，次はどうやって調べるかが問題となる。調べたいことの内容によって，子どもたちは「実際に自分で確かめる」「本で調べる」「おうちの人に聞く」などの方法を考えた。その中から，「実際に自分で確かめる」ことを学級全員で行った。それは，学校の周りにも実際に点字タイルが多く敷かれていることを知ってほしいという願いからである。右の写真でわかるように，子どもたちは教室の中でしたように，手で触ったり足で感触を確かめたり，実際に目をつむって歩くことができるか確かめたりした。色や形も違う点字タイルがあることにも気づいた。そして，学校の周りに，意外なほどたくさん点字タイルがあることに，改めて認識を新たにしたと思う。次に，「身の周りに点字タイルに似ていて，もっと小さいものはないかな？」となげかけたところ，「小さなぶつぶつがあるよ。」という子どもの発言から，どこにあるのか聞いてみた。子どもの気づきは次のとおりである。

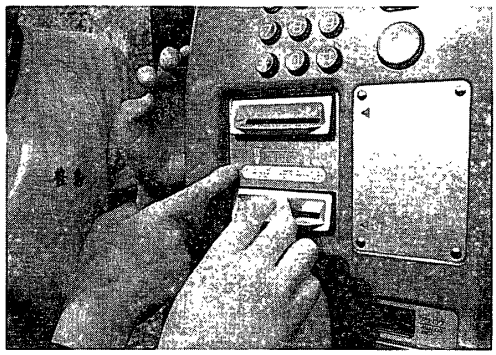
ビールの缶の上　駅の階段　駅のバス停　エレベーターのボタン　公衆電話　紙幣

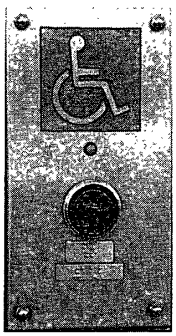
実際に，学校の近くのポストと，公衆電話に行って確かめることにした。子どもたちはいろいろ

な場所に点字があることに気がついた。右の写真のように，ポストには，差し出し口と取集時刻の表に，公衆電話には，テレホンカードの挿入口と，硬貨の投入口に点字がある。私は，ポストの取集時刻の表に点字があることにこれまで気がついておらず，子どもたちと一緒に気がついたことの喜びを感じとることができた。子どもたちが出した気づきの中で，実際に全員が確認できないものについては，写真を見ることで代えることにした。町の中で使われている点字タイルも紹介した。

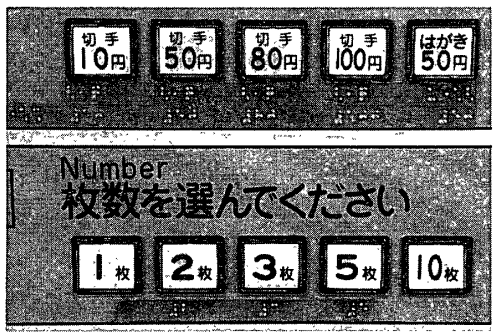








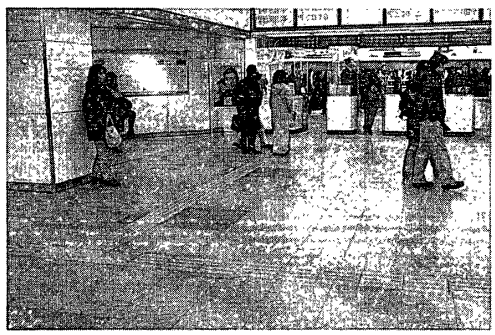
エレベーター



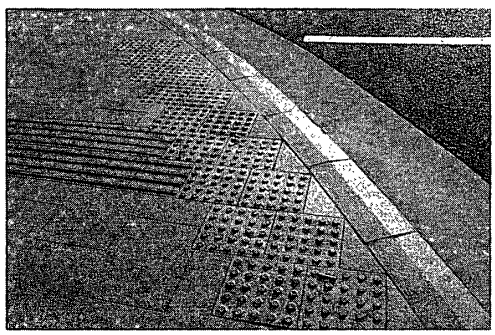
切手・はがきの自動販売機

駅の地下道の入り口の手すり

これらの写真からわかるように，目の不自由な人が普通に暮らすことができるように，様々な配慮がなされていることがわかる。



駅の構内



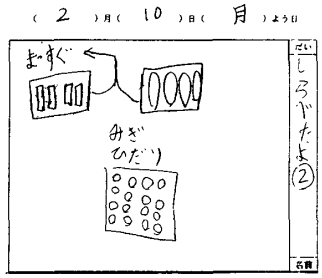
歩道の一部

⑨ 調べたいことを自分で確かめる

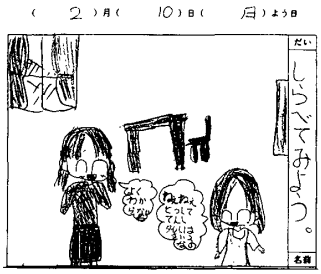
子どもたちの調べたいことの中には，人に聞いたり，本で調べたりすることで確かめなくてはならないことも多かった。数日期間を置き，自由に調べて，確かめてみることにした。そのいくつかを紹介したい。

わたしのしらべたいことは，ほかのくににもてんじタイルがあるかどうかをしらべました。しらべかたは，わたしのおとうさんがえいごをならっていて，その先生にきいてもらいました。そうしたら，てんじタイルよりも，もうどう犬がおおいといいました。てんじたいるは，ちょっとしかいないといっていました。なんでだろうとおもいました。てんじは，目のふじゆうな人のためにあります。すごいなあとおもいます。

わたしのしらべてみたいことは，「おうだんほどうのまえは，なんでタイルの中がまるいの。」です。わたしは，おにいちゃんとおとうさんにききました。そして，中がまるのときは，おうだんほどうの目のまえにあって，中が「まるみたいなしかく」「しかく」のときは，まっすぐにあるくといっていました。でも，ちがうかもしれません。



わたしのしらべてみたいことは「どうしててんじタイルはきいろなのか」ということですしらべかたはおかあさんやおとうさんにきいたりしました。だけどわかりませんでした。



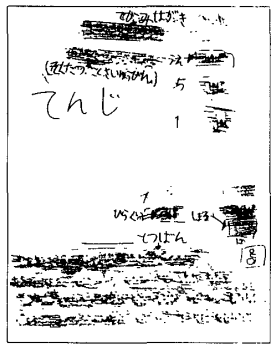
ぼくのしらべたいことは，げんりょうです。しらべかたは，おにいちゃんにききました。そして，げんりょうは，やっぱりゴムでした。そして，としょかんにいったけど，どこでつくられているかは，本はあったけど，のっていませんでした。けど，おにいちゃんがいったのは，ほんとうかどうかはわかりません。

このような子どもたちの表現から，調べる方法は，「人に聞く」ことがほとんどである。自分で調べるといっても，１年生の児童には，おのずと限界がある。逆に言えば，人に聞くことは，１年生にとってみれば，ごく自然の方法であろう。このような活動を続けていくうちに，さらに活動が広がりを見せた。

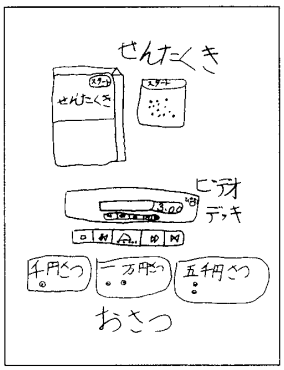
⑩　活動の広がり

自分で調べる活動をしていくうち，おうちの人に協力してもらって，公共の図書館につれていってもらい，点字の絵本を借りてきた子どもや，点字を紙に写してきた子どもたちが出てきた。実際に絵本に触れたり，それを紙に写したりする活動が教室の中で始まり「点字ってどう読んだらいいの？」「点字のあいうえおの表があるよ。」など点字を読んでみたいという思いを持つ子どもたちも増えてきた。点字を読んだり書いたり（点訳）する活動は，２年生からの活動として位置付けることができたらと思う。このような活動の広がりは，もっと身近なところへと目を向けていくこととなった。それは，自分の家の中に点字がないかということである。１人の女の子が，次のようなものがあったと朝の会で紹介した。

点字の絵本



点字を紙に写したもの



- 洗濯機のスタートやストップの上の方に点字があります。私は読めません。どう書いてあるのかな。
- ビデオデッキの下に，ぶつぶつが5個あります。目の不自由な人がビデオを見るとき，▶や■がわかるから，あるのだとおもいます。
- おさつには，ドーナツみたいなまるい点字（？）がありました。1万円札には○が2個，5千円札には○がたてに2個，千円札には○が1個です。

この話を聞いて，多くの子どもが自分の家庭のビデオデッキと紙幣を確かめたのである。その結果，比較的新しい洗濯機とビデオデッキには，ぶつぶつがあることがわかった。紙幣については，みんなが確かめることができた。私自身，家庭電化製品など本当に身近なものにまで，視覚障害者の方々がふつうに暮らしていくことができる配慮がなされていることに気づかされた。きっと，子どもたちも，本当に身近なところに点字（または点字に類するもの）があることに，びっくりしたのではないかと思う。

3　成果と今後の課題

本実践では，自分なりに考えを持ち，考えに基づいて判断したり決定したりする子どもをめざしてみた。点字タイルにふれることによって多くの問いを持つならば，自分の調べたいことを見つけるであろうとした，単元導入時の授業意図は，ある程度達成されたように思う。

その後，一連の学習活動の中で，自分の調べてみたいことを何とか調べることができた。しかし，「調べたけれどよく分かりませんでした。」とか，「○○に聞いてみたけれど，本当かどうか分かりません。」という子どもたちの反応があった。低学年の段階では，人に聞いたり本で調べたりという方法が多いと考えられる。その場合，人に聞いたのでは，本当にそうなのか自身が持てないし，本で調べる場合，自分が求めている情報がどこにあるのか探すことができないなど，いろいろな問題点が出てきた。このことは，今後，問題解決的な学習を積み重ねていき，自分なりの解決方法を見つけることができるようにさせていきたい。そのためには，子どもたちがどのような課題設定をし，どのような解決方法を採るのかという段階で，適切な支援が必要となろう。

自分で実際に点字タイルがある場所に行って調べたり，身の回りの点字を探す活動では，生き生きと活動する子どもの姿を多く見ることができた。また，保護者の中に，一連の学習内容に賛同して下さる方がおられ，資料や情報を提供して下さったことも，うれしい出来事であった。公共の図書館で点字絵本を借りてきていただき，実際に触れることで，子どもたちの意欲が深まったことも事実である。たくさんの保護者の方に，この場を借りて，お礼を申し上げたい。

「てんじってなあに」という単元は，6年生まで連続して扱うことができる単元ではないかと考える。点字の読み方，点訳の仕方，視覚障害者の方とのふれあいなど，様々な活動が学年に応じて設定することが可能であろう。その中で我々に求められることは，正しい障害者理解であろう。学習材としては魅力があるが，出会わせ方などは，慎重に行っていきたい。多くの子どもたちが，「点字のことを知って良かった。」という思いを持つことができるように，実践を続けていきたい。

〈資　料〉

日本点字図書館　〒169 東京都新宿区高田の馬場1-23-4　03-3209-0241

点字絵本「友だちがきました」　著者　広瀬之宏　発行所　株式会社遊タイム出版

「ちょきちょき　ちょきん」著者　樋口道子・岩田美津子

発行所　てんやく絵本ふれあい文庫　発売元　こぐま社